Japanese Association for Religious Studies

寺では三十三回忌の頃には本願寺の祖師として、二百回忌（一四六一）の頃には如来の化身である浄土真宗の開山聖人として、近世には遠忌を契機として宗祖としての親鸞像が、あるいは超人的で貴族的な親鸞像として、宗派の内外で流布されている。真宗各派が拡大し、宗派意識が高まり、社会的な影響力を持つとともに、そこで描き出される親鸞像にも変化が見受けられる。また、遠忌を契機として真宗各派がそれぞれの宗祖像を発信し、宗門外でも芸能や出版によって民衆が語る親鸞像が登場するなど、五十年毎の遠忌を強く意識することが定着したのも近世（江戸時代）である。

近代になると、六百五十回忌（一九一一）の頃は近世親鸞伝の影響を残しながらも史実に基づいた親鸞像が志向され、七百回忌（一九六一）では史実としての親鸞像が追求され、戦後という時代を色濃く反映した、反権力的で民衆的な親鸞像が主張され、現在にも遺る。そして七百五十回忌では、史実としての親鸞像の更なる追求とともに、近世親鸞伝（伝承史料）において語り伝えられた親鸞像も再び注目されている。真宗八百年の歴史を、真宗門徒八百年の信仰史として捉えることで、現代の感覚では夢物語と見なされる奇瑞伝説を記した書であっても、本願他力の世界に導く教義書として認めるという、古くそして新しい視点を蘇らせたのである。この奇瑞・奇跡を起こす超人的親鸞像をどのように理解するかは近世以来の課題でもあるが、それは遠忌が過ぎると集約されることなく忘れられる傾向にある。親鸞伝の一分野として体系化することが当面の課題となろう。

三月十一日の震災は、後世に伝えられるであろう親鸞像にどのような影響を与えるのであろうか。遠忌の場では、震災によって噴出し、突き付けられた課題について宗祖としての親鸞に応答しようという姿勢が見受けられた。そこでは、親鸞が災害に遭った同行たちへ送った文応元年の乗信宛消息（『末灯鈔』六）、『歎異抄』第四章などの遺訓をどのように受けとめるかが真宗門徒の課題となった。また、江戸時代に発生した災害や飢饉に直面した真宗門徒の生き様（砺波門徒など北陸門徒の東国移住）も、歴史の中から読みとられたものである。これまでの遠忌で顕れた親鸞像を考察することに加え、震災以降の社会の激変においてどのような親鸞像が、また真宗像が浮かび上がるのかということが、今回の考察である。

浄土真宗と現代社会

林　智康

今年から来年にかけて、浄土真宗の開祖親鸞聖人七百五十回大遠忌（御遠忌）法要が厳修されている。真宗十派（真宗教団連合）においては、それぞれ法要のテーマ・基本理念を掲げている。法要を迎えるにあたって、各派とも、親鸞聖人の生き方、教えを学ぶとともに、現代の一番大きな問題である生命（いのち）について考える傾向が見られる。

現代、死生観・死生学（thanatology）という言葉が注目されている。サナトロジー（タナトロジー）は死が根本にあって

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

生を考える。死を見つめて生きる。死を覚悟して生きる。いかに生きるかを死のところまで深め、掘り下げて考える学問である。現在、龍谷大学の「人間・科学・宗教オープン・リサーチセンター」で、文部科学省からの支援を受けて「死生観と超越―仏教と諸科学の学際的研究」というテーマで研究が進められている。

この死生観が生命（いのち）の問題と密接に関わってくる。仏教ではこの生と死を一緒にして生死（しょうじ）、サンサーラ（saṃsāra）といい、輪廻という語と同じである。親鸞聖人の『高僧和讃』に、「生死の苦海ほとりなし　ひさしくしづめるわれらをば　弥陀弘誓のふねのみぞ　のせてかならずわたしける」とあり、迷いの生死の苦海に沈んでいる私たちを、阿弥陀仏の本願の船のみが、乗せて必ず浄土へ導くと述べられる。

現代は少子高齢化社会、無縁社会といわれ、生命（いのち）の尊厳、生命倫理が重視されている。生の問題として、人工授精、代理懐胎、出生前の診断、生殖補助医療など、これらは遺伝子の問題に関わってくる。またクローン技術や人工妊娠中絶がある。死の問題としても数多くあり、末期医学の緩和ケア、ホスピスとビハーラ、従来の死の定義である心臓停止、呼吸停止、瞳孔開きの三兆候に対して、今日は脳死・臓器移植が問題になる。また植物人間や認知症、安楽死と尊厳死、自殺と他殺、いじめと虐待、死刑制度、死の準備教育（デス・エデュケーション）（デス・カウンセリング）、葬儀とグリーフ（悲歎）・ケア、被災と支援・ボランティア活動などが考えられる。

『往生要集』上巻に『涅槃経』を引いて、「一切のもろもろの世間に、生ぜるものはみな死に帰す。寿命、無量なりといへども、かならず終尽することあり。それ盛りなるはかならず衰することあり、合会（ごうえ）するは別離あり。壮年は久しく停まらず、盛りなる色は病に侵さる。命は死のために呑まれ、法として常なるものあることなし」と述べる。生命（いのち）あるものは限りがあり、会うものは別れがある。

仏教は転迷開悟を説き、仏の教えであるとともに仏に成る教えでもある。浄土真宗は六波羅蜜行などの諸行によらず、弥陀の本願を信じ念仏を称えることによって、浄土に往生して涅槃を証する教えである。真実信心を獲得する念仏者は、現生において正定聚の位に住す。信心の定まるとき往生が定まり、臨終来迎を否定する。現生に十種の益を獲る中、「知恩報徳の益」、「常行大悲の益」が、念仏者の社会的実践に深く関わるものと思われる。

『安楽集』にある如く、念仏を伝えることが「常行大悲の益」であり、『集諸経往生礼懺儀』にある如く、「自信教人信」は難中の難であるが、如来の大悲が弘く普く念仏者を通して他者に伝わり、これが真に仏恩を報ずることになると、「知恩報徳の益」を述べられる。

「浄土」の表現について、親鸞聖人は物質的・感覚的表現である極楽よりも、精神的・本質的表現である真土・無量光明土・諸智土・安楽国・安養国を示される。『高僧和讃』に「安楽仏国に生ずるは　畢竟成仏の道路にて　無上の方便なりければ　諸仏浄土をすすめけり」と、浄土へ往生することはすなわち成仏することであると述べられている。

NII-Electronic Library Service